

4 地先型増殖場調査

佐藤太津真*・斎藤 健

目 的

地先型増殖場の磯根漁場としての現状を把握し、海藻増殖のための検討資料を得る。

方 法

(1) ウニ生息密度調査

平成14年2月27日、増殖場内の図1に示す5定点を定め、それぞれの定点からラインを50m沖出しし、各ライン上10m間隔に設定したラベルを中心に1m×1m方形枠で4カ所、計4㎡内に生息するキタムラサキウニ個体数を計数した。

(2) コンブ養殖試験

平成13年12月7日に図2に示すとおり地先型増殖場内の3型嵩上礁の間にコンブ養殖用ロープを設置し、月1回の割合でスキューバ潜水して観察を行った。

結 果

(1) ウニ密度調査

ラインごとの調査結果を表1に、定点からの距離（水深）別の結果を表2に示した。ライン別の調査結果ではブロックの外部よりも内部で生息密度が低かった。また、距離（水深）別の分布では沖ほど密度が高かった。増殖場内の平均密度は1.54個/㎡で、昨年同時期の結果2.51個/㎡よりも低かった。

(2) コンブ養殖試験

設置1ヶ月後の平成14年1月12日には約2cm程度のコンブ幼体が観察された。観察された部位はロープ幹糸から余った種糸の部分のみで、幹糸からの成長は目視では認められなかった。

2ヶ月後の平成14年2月7日には成長の良いもので10cm程度に成長していたが、発生部位は1ヶ月目と同様、種糸の余った部分からであった。

3ヶ月後の平成14年2月27日には幹糸からも発生が見られ、成長の良いもので30cm程度まで成長していた。また、成長している場所としていない場所での差が激しく、養殖ロープのうち、ナダ側の嵩上げ礁に近い部分ほど発生本数が多く、成長も良かった。これは、水深がより浅いため、照度が得られるためと考えられた。ロープの沖側は水深が深く自然の照度が得られないことに加え、砂等が巻き上げるため、非常に濁りやすく、常に薄暗い状態であり、周辺に海藻も見られていない。従ってコンブの生育に適合しにくい場所であると考えられたが、常磐海域においてはコンブは6～7月まで成長するので継続調査が必要である。

*現 水産課